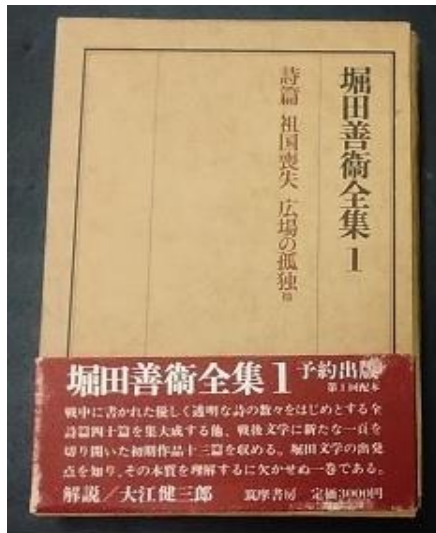


essais ころみ 2019年8月

(再掲) 2019年4月1日(月) 朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」
『堀田善衛全集』見なおす試み

堀田善衛全集(筑摩書房 1974年6月20日発刊開始)



2019年8月2日(金) 晴、晴、晴

今日はこの夏一番の暑さ。昼下がりに外へ出た時、日傘をさしている若手の会社員らしき男性をみた。そう、男性も日傘をさしましょう。この炎天下、直射日光をうけるなんて、見ているほうがツライ。それでも8月、日は少し短くなってきた。

一夏はノスタルジックー雑感・雑記② アイデンティティ(続)

仕事のおかげで、たくさんの人たちと出会う。独立してもまもない段階でも、人を見る見え方が人によってかなり違うということはわかった。その後『皮膚は考える』という本も読んでいたので触覚もけっこう個人差があるとは思っていた。

それ以上あまり深く考えなかったが、数年前に「HSC」(ひといちばい敏感な子)を知り、五感の感度の個人差に気が向くようになった。それ以来電車に乗ってカーブでブレーキの高い音で耳をふさいだ時、車内を見渡すようになった。誰も同じようにしている人はいない。

今年に入って音楽の仕事長くやっていた人と出会った。話をしている、なるほど、そういうこともあるなあ…。初対面で相手の声を褒めるような人は聴覚が長けた人、表情を褒める人は視覚が優れると思うそう。

その話をきいていた別な一人が、それなら自分は嗅覚型という。匂いに敏感で、匂いの相性みたいなものが合わないとか、親しくなれないとか。匂いばかりは妥協できないというから、ほお一と感心してしまった。

そんなこんなことをとりまとめて考えたことは、〈他の誰でもないその人〉という意味でのアイデンティティは、五感が一番の源になっているのではないかということ。

人間の情報経路は五感というから、学習能力ともつながっていくと考えているが、そこまで詰めると深みにはまるので、これぐらいにして、ともあれ、パーソナル・アシスタントとしては、その人ならではの総合的にみてとりアシストできるよう、「五感」も忘れずと思う今日この頃

2019年8月8日（木） 今のところ晴れ

昨夕かすかに秋を感じた。風に秋の空気がしのびこんでいるようだった。今日も熱中症に要注意の高温予想だが、暦の上では立秋。今夜は上弦の月。

ー夏はノスタルジックー雑感・雑記③ 残したいものの究極

クレオ大阪中央館4階に設けられている阪市の「女性チャレンジ応援拠点」は予約不要でふらっと寄って相談できる場。誰かのためになる仕事で自分の未来を拓こうとする女性たちが三々五々集う。

集った人どうしの会話もはずむ。初対面でもけっこう率直にオープンに語り合う。やることは違っていても、チャレンジ精神があるのは共通しているからだろう。相手の話をよく聴き、感じたことや自分の考えを返す。

わたしは水曜の夜を担当している。利用者のみなさんの話を聴き、対話しながら、あらためて、人それぞれの異質性に感嘆する。話せば話すほど、細部の違いがみえてくる。よい勉強になっている。

先日は利用者のお一人が参加したワークショップの様子を話してくれた。自分の人生にとってなくしたくないものを20挙げ、その中から絶対になくしたくない、残したいものの究極を最後に一つ選ぶというワーク。

参加者には若い人も多かったらしい。20挙げた段階でも参加者どうし、その内容の違いに驚いたらしいが、究極の一つはその最たるもの。一番印象的だったのは「自分の記憶」を挙げた若者だったそう。

まだ30年ほどして生きていない青年の、究極に残したいものが自分の記憶とは…。それを発表する際、当人は涙を流していたという。どういう意味があるのだろうか、何があったのだろうか。

自分の残したいものの究極、それは何だろう。帰り道、わたし自身にも問うた。わりとすぐに答えがかえってきた。自分がこの世に存在したという事実を残したい。

このことは20数年前にみつけた答え。リーズレターを書き、リーズサロンを主宰するのは、子どものいないわたしが、自分の存在をこの世に刻むためにやっているのではないかと考えたのだった。

そのことも一つだが、今はもう少し広い視野というか、もっと本質的なものがあるだろうと感じている。

2019年8月12日



2019年8月19日（月） 曇り時々晴れ

残暑厳しいのに、夜には虫の声が聞こえだした。なんとなく、ありがたい。高校野球も佳境、お盆のお休みモードもすぎて、夏を惜しむような感覚へ。自分のために何かやりのこしているような、そんな気持ちになるのは、夏の終わりのなせるわざか。

ー夏はノスタルジックー雑感・雑記④ 「少年時代」

毎年このぐらいになると、「少年時代」のあのなんともいえないノスタルジックな曲調と陽水の声、そして冒頭の歌詞がずっと頭の中に流れてくる。やはり詩人だ、「井上陽水」は。

夏の終わり、まだ先にある秋。その狭間のこの時期、自分に押し寄せるこのムードを歓迎する。しばらく忘れていたことをぱっと思いついたりして、とたんに新しい予定を立てたり。

9月に入ると、世の中全体、大人も子どもも、一気に年末まで事が進む。だいたいの人が夏の休暇をとり終えた月末までの間に、「少年時代」ならぬ、「われにかえる」時間をもつとしようか。